
OH！ポップスター

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OH!ポップスター

【Nコード】

N3684D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

貧乏のどん底からスターになってお金で買えないものは何もないと思っていたけれどそれは大きな間違いだった。チェッカーズシリーズ第二十五弾、カバールのフミヤさんのヘアースタイルが凄かったです。

第一章

OH！ポップスター

「青春が渡れない河あるねと」
「全くだな」

俺はラジオでその歌を聴いて一人呟いた。その歌を歌っているのは俺だ。俺が歌っている。まさかこんな荒んだやりきれない気持ちで自分の歌を聴くことになるとは思わなかった。

後ろを振り向くとそこにはベイブリッジがある。もう戻ることはない。戻りたくもない。俺の青春があった場所、二度と思い出したくない青春のある場所だ。

粉雪が摩天楼の中で降って海にも道路にも舞い降りる。俺はその中で歩きながらこれまでのことを思い出していた。思い出したくないが思い出してしまっ、そんな状況だった。

あの時俺は屋根裏の部屋で暮らしていた。最初は一人だった。バイトをしたり道で歌ったりして生きていた。貧しかったが何時か夢を掴んでみせる、そう思いながら生きていた。

そんなある日のことだった。その日はレストランで流しの歌を流していると誰かが声をかけてきた。

「いい曲ね」

女の子の声だった。そこを振り向くとブラウンの髪と目の背の高い娘がいた。白いシャツに青いジーンズといったラフな格好が似合っていた。

「誰の曲かしら」

「ビッグスターの曲さ」

洒落たアメリカンなレストランの中で席を一つ貰ってギターを鳴らして歌っていた。その俺に声をかけてきた。

「ビッグスター？」

「ああ」

俺はニヤリと笑って彼女に応えた。

「その通りさ」

「そのわりには知らない曲だけれど」

「当然だろうな」

そのニヤリとした笑みで彼女に言葉を返した。

「これからスターになる奴の曲だからな」

「それは誰？」

彼女は悪戯っぽく笑って俺に声をかけてきた。

「俺さ」

「下手な冗談ね」

俺のその言葉を聞くと少し吹き出してきた。けれど俺は自信に満ちた顔でそれに返した。少なくとも俺にはこの時は絶対の自信があった。

「けれど歌は上手いぜ」

俺は悪びれずに言い返した。

「それはわかるよな」

「そうね。悪くはないわ」

彼女もそれを認めてきた。笑いながら言葉を返してきた。

「その曲は」

「そうだろ？じゃあ聴くかい？」

「ええ」

にこりと笑って俺の側に座って曲を聴きだした。これが俺と彼女の出会いだった。

彼女は学生だった。カレッジに通うごく普通の女の子だった。俺はハイスクールを出てそのままこの街に一人で出て来た。それからずっとこうして暮らしてきた。

アメリカン・ドリームとは言うがそれを掴むのは難しい。中々掴めるものじゃない。実際に俺は何年も貧乏暮らしだ。それが現実なものもわかっていた。

それでも夢は掴みたかった。だからこうしてやってきた。屋根裏

で一人で。次に会った時もそうだった。俺は今度は道でギターを鳴らして歌っていた。

「今度は新曲？」

「曲は幾らでも考えつくんでね」

顔を見上げて彼女に応えた。春の眩しい日差しの中で。

俺はベンチの上に座っていた。その横に彼女が来たのだ。俺を見下ろすようにしてあのくすりとした笑みで声をかけてきたのだ。やっぱりジーンズが似合っていた。

「それでそれを歌ってるってわけさ」

「今何曲持つてるの？」

「百曲はあるな」

俺は平然としてそう答えた。

「多いだろ」

「数はね」

憎まれ口めいたことを述べてきた。

「他はどうかしら」

「この曲聴いて何も思わないんだったらあんたセンスないぜ」

俺は笑ってこう言っちゃった。

「いい曲だろうが」

「まあね」

笑ったまま俺に頷いてきた。

「この前の曲もよかったけれど」

「あれはそこそこ有名なんだよ」

「へえ」

俺のこの言葉に楽しそうに笑ってきた。実際に俺との言葉のやり取りを楽しんでいる感じであった。

「そうなんだ」

「そうさ、それでな」

俺はさらに言葉を続けて述べた。

「この曲もそうなんだよ」

「今の曲ね」

「悪くないだろ？」

あえてサビをギターで聴かせてみた。

「この曲もな」

「少なくともファンは作れるわね」

「どうも。それでそのファンは何処かな」

「ここに一人ね」

つまり自分自身だと。こう言ってきたのだ。にこりとした笑みに変えて俺の顔を見下ろしながら。実際に楽しむ顔で俺の顔を覗き込んでいた。

「いるわよ」

「惚れたってわけか」

「ええ。よかつたらさ」

俺の横に腰掛けてきた。そのうえでまた言ってきた。

「もっと聴かせてくれないかしら」

「チップは弾んでくれるんだろうな」

「あら、シビアね」

「結局コインが全てなんだよ」

俺はそうした信条だった。売れなければ話にならないと思っていた。アメリカン・ドリームってやつは大金持ちになることだとばかり思っていた。今思うと俺は本当に馬鹿だった。

「全部な」

「そうかしら」

彼女はくすりと笑って俺に言葉を返してきた。俺もそれを受ける。

「そうだったら随分簡単だと思うけれど」

「簡単なんだよ」

何もわからないまま言った。

「世の中ってというのはな」

「それを確かめる為に音楽やってるの？」

「いや」

その問いには首を横に振った。音楽への気持ちは本物だった。

「音楽は好きさ。それは本当のことさ」

「そうなの」

「ああ、じゃあ聴くかい？」

また声をかけてみた。彼女を見ながら。

「俺の曲を」

「そうね。最後まで全部の曲聴きたいわ」

「そりゃどうも。じゃあ何度でも難局でも聴きな」

「ええ」

こうして二人の付き合いがはじまった。俺達はすぐに一緒に暮らすようになって彼女にも何度も何曲も聴かせた。楽しい時間を過ごしていた。

そんなある日だ。俺はまた仕事が入ったことを彼女に教えた。

「またギターの仕事が入ったよ」

「よかったじゃない」

屋根裏の部屋に彼女が待っていた。その中で空のグラスを拭いていた。

「それで何処で仕事するの？」

「ライブ会場さ」

「あら、凄いじゃない」

俺の言葉に目を輝かせてくれた。まるで自分のことのように。

「ライブだなんて」

「そうだろ。何か凄いラッキーだよ」

俺は笑いながらそれに応えた。ギターを部屋の隅に置いてベッドの上に座った。彼女は椅子に座ってグラスを拭いて俺の方を見ていた。

「今でも夢みたいだ」

「お金は？」

「そっちもだよ」

俺は笑ってそれに応えた。

「かなりいいんだ、これで酒が買えるぜ」

「じゃあ乾杯する？」

「ああ」

俺はその言葉に頷く。

「何もないけれどな」

「それでもね」

空のグラスで乾杯した。金が思いきり入ることに俺はとにかく嬉しかった。それだけを考えていた。金さえあればそれで幸せになれると思っていた。

第二章

ライブの仕事が縁で大手の事務所から声が入ってきた。そうしてそれからほとんどん拍子で話が進んで気付いた時にはCDまで出ることになった。

「デビューってことよね」

「そうさ」

屋根裏の部屋で彼女に話す。俺はもう完全に有頂天になっていた。

「メジャーだよ、凄いだよ」

「何か急に凄いことになってない？」

「なってるよ」

俺は笑って言葉を返した。

「もうこの屋根裏の部屋だっておさらばだしな」

「売れるの？そんなに」

「売れるさ」

俺は自信満々で答えた。今はビールをあおっていた。少なくとも酒が楽に買える程には贅沢にはなっていた。だがそれ以上に豊かになっっていた。

「絶対にな。ポスターだってできてるんだぜ」

「ポスター!？」

「そうさ、これ」

俺のそのポスターを見せた。事務所が躍起に売り出しに乗ってくれたからだ。今まで着たことのないような派手な服を着て映っていた。

「どうだよ、これ」

「別人みたい」

「ああ、これからの俺の姿だよ」

また自信に満ちた声で返した。

「これからのな」

「おめでとつ。とにかくこれからね」

「ああ、これからだ」

その言葉に頷く。そうなるそばかり思っていた。

「どんどん売れていくぜ、大金持ちだ」

「そう。やっぱりお金なのね」

「当たり前だろ、それがアメリカン・ドリームだろ」

こう言ってやった。彼女がほんの少しだけ寂しげな顔になったことに気付かなかった。俺はアメリカン・ドリームも幸せも全部金だとばかり思っていた。この時だつてそうだった。金があれば何だつてできるというのはデビュー前からずっと変わつてはいなかった。

「だからさ」

「それで大金持ちになったらどうするの？」

「もっと金を集めるだけだよ」

俺は何も考えずに言った。

「もっとな」

「もっとなのね」

「ああ、豪邸建てていい車買ってな」 84

貧相な夢だ。けれどこの時は見果てぬ夢だった。

「投資でもしてもっと大金持ちになるんだよ」

「そう、ずっと」

「ああ、ずっとさ」

また言った。この時も考えてはいなかった。

「そうしてな」

「他のことはいいのね」

「全然」

笑つてビールを口に含んだ。そこで窓から夜空が見えた。雲一つなく星が嫌になる位見える。高い屋根裏にあるから余計に見える。

「こんな狭い部屋ともおさらばだぜ」

「私ね、この部屋何か気に入ってきたけれど」

「おいおい、嘘だろ」

その言葉に思いきり笑った。

「こんなぼろい部屋がかよ」

「私最近思うのよ」

彼女はここで俯いてきた。俯いて俺に言ってきた。

「このままでいいのかもって」

「欲がないな、何か」

その言葉に思わず笑って返した。

「こんなところでいいなんてな」

「変かしら」

「変だよ、変」

ビールの勢いもあって言い返した。自分でかなり気が乗っているのがわかった。

「今のままでいい筈ないだろ。もっと金が欲しいんだよ」

「もつともつとで何処までも」

「ああ。何処までもな」

「それが貴方の望みで」

「御前だつて一緒に大金持ちになれるんだぜ」

彼女を好きだったのは本当だった。しかしそれよりもやっぱり金の方が欲しかったのは事実だ。何処までも金だった。俺は金ばかり考えてデビューして売れた。そう、売れた。

売れっ子になってアルバムもヒットしてコンサートにテレビに大忙しになった。ギャラはどんどんあがり俺は望み通り大金持ちになった。屋根裏はとつくの昔に引き払って豪勢なアパートに引っ越していた。摩天楼のど真ん中にあるアパートにだ。俺は完全に有頂天だった。

「まだまだよ」

そのアパートで楽しく高級のワインをあおりながら一緒にいる彼女に言う。どういっわけか浮かない顔をしていたがその理由は見なかった。

「まだまだ売れて金を手に入れるぜ」

「もう充分じゃなくて？」

「何言ってるんだよ」

その問いに馬鹿にしたように返して言ってるやつだ。

「まだ豪邸も車もないだろ。まだまだなんだよ」

「けれど売れてアメリカ中に名前知られて」

「馬鹿だな、そんなのは途中なんだよ」

俺は確かにポップスターになった。けれどそんなことで満足してはいなかった。まだまだ一杯の金が欲しかったからだ。夢を掴んでいないと思っていた。

「まだまだな」

「そう、ずっとお金なのね」

「当然だろ？」

俺は何を今更といった感じで言い返した。

「それでどうしてなんだよ」

「そうよね。それじゃあ」

「ああ、もっと売れてやるさ。そして」

「売れるのもいいけれど」

彼女はここで寂しい顔になった。今までよりもっと。

「どうしたんだ？」

「落ち着かない？」

そしてこう言ってきた。

「少し。それで二人でさ、もっと一緒に時間とか」

「もっと金が入ったらな」

俺は何も考えずにそう答えた。

「考えるさ。少なくとも今じゃないな」

「今じゃなくても。落ち着いてもいいんじゃないかしら」

いつもはこんなことは言わなかったのに今日は特別だった。そのことがやけに心に残った。

第三章

「そう思わない？もう充分お金は入ったし」

「これで充分って思ってたらアメリカン・ドリームじゃないな」

俺はやっぱり何も考えずにこう返した。この時は何を馬鹿なことを言ってるんだと心の底から思った。そうした意味で本当に俺は、この時馬鹿だった。

「だろ？だから豪邸に車に御馳走に」

「それだけあつたら幸せ！？」

「ないのに比べたらな」

俺はまた言った。

「貧乏暮らしなんかには幸せはないんだよ。金が全てなんだからな」

「私ね、思うの」

彼女は目まで寂しくさせて俺に言ってきた。

「お金がなくても幸せになれるんじゃないかって。どうかな」

「戯言さ、そんなのは」

そうとしか思えなかった。

「そんなことを言っても。何もなりやしないだろうな」

「そうかな、やっぱり」

「そうさ。何になるんだよ」

そう言葉を繰り返す。この時の俺には何もわからなかったから。

「一体全体」

「だったらいいわ」

目を伏せて言ってきた。

「私がおかしい思い違いしているのかも知れないし」

「そうさ。それよりもな」

ここで俺は上機嫌で話を変えてきた。

「何？」

「これ、聴いてくれよ」

そう言って彼女に俺の新曲を紹介した。ギターを鳴らしてだ。

「この曲どう思う？いいか？」

「そうね」

今度の俺の問いには静かに微笑んで頷いてくれた。

「いいと思うわ。ノリのいい曲で」

「この曲も売れるな」

そのことにまずは満足した。結局売れるかどうかしか考えちゃいなかった。いい曲も全てその為だった。幸せは金で曲じゃないと思っってしまった。いや、幸せが何なのかも俺はわかっていなかった。

「売れたらいいよ豪邸と車だ」

「リムジン？」

「いいな。あれに乗るの夢だったんだよ」

上を見上げて恍惚となった顔になっているのが自分でもわかる。

俺はこの時馬鹿でかいリムジンの中で微笑む自分を見ていた。

「それで行き来してな」

「今までのレストアしたバイクじゃなくて」

「豪邸が入ったらおさらばだな、運転手付きのリムジンがあるのに
いらないだろ？」

「それはそうだけれど」

けれどやけに不満そうだった。俯いているのは顔だけではなかったからだ。

「それでもね。何か」

「まあ楽しみにしといてくれよ」

ギターを鳴らしながら上機嫌で言っただけ。

「御前も一緒だからな」

「ええ」

元氣のない返事だった。その新曲は俺の予想通り爆発的に売れた。俺はその印税やテレビの出演料なんかで豪邸とリムジンを買えるだけの金が手に入った。ニューヨークの郊外にでかい家を建ててそこ

に住むことにした。

けれどそれと共に彼女はさらに塞ぎ込むようになった。俺はやはりその理由はわからなかった。

「どうしたんだよ、本当に」

「本当に何でもないから」

豪邸やリムジンの話を聞いても喜ばず俯くばかりになっていた。

俺達はこの時リビングのソファーに向かい合って楽しく酒を楽しんでいた。少なくとも俺はそのつもりだった。その時に塞ぎ込んだ彼女の顔を見たのだ。

「気にしないで」

「だといいいけれどな」

訳を聞いても話さないのだからそれに応えた、

「それならそれで」

「うん」

「御前の部屋もあるからよ。だから」

「ねえ」

そしてまた俺に声をかけてきた。その沈んだ声で。

「何だよ」

「このアパートも出るのよね」

今更といった感じの問いをかけてきた。

「やっぱり」

「だから家建ててるんじゃないか」

俺は笑ってそう言葉を返した。何でそんなことを言うのかわからなかった。

「そうだろ？だから」

「そうよね」

彼女はその言葉に頷く。やはり沈んだ顔で。

「御免なさい、変なこと聞いて」

「気持ちが悪んでるんだっいたら飲めよ」

缶ビールを投げた。これは昔から好きなので今でも飲んでる。

ビールだけは安くても別にいい、それが俺の考えだった。

「ほら」

「有り難う。けれど」

「いいから飲めって」

俺は笑ってそう返した。

「気が楽になるからよ」

「それでも」

「いいのかよ」

「御免なさい、やっぱり」

そう応えて缶を俺に戻してきた。それは仕方なく受け取ることにした。

「何だよ、面白くないな」

「気分じゃないのよ」

やっぱり沈んだ声で返してくる。

「どうしても」

「だったら無理強いはしないけれどな。それでな」

俺は彼女の気持ちに気付かずにもた言ってきた。ビールは俺が飲むことにした。投げたので泡が出たがそれも飲む。一本すぐに空けてから話を聞く。

第四章

「家に入ったらパーティーしようぜ」

「パーティー!？」

「ああ、特別にシェフ呼んでな、祝うんだよ」

有頂天でこう提案した。

「友達皆呼んでな。どうだよ」

「それが楽しみなのね」

「そうさ、アメリカン・ドリームを掴んだってことだからな」

機嫌よくそう言う俺はそれしか見えてはいなかった。もっともそのアメリカン・ドリームさえ本当のところは何もわかつちゃいなかった。

「折角だしさ。派手にやろうぜ」

「いいわね」

感情の籠らない声で応えてきた。

「それも何か」

「いいんだよ」

俺は疑うことなくそう返した。彼女のその言葉を。

「今そつちの準備もしてるからな、楽しみにしてくれよ」

「そうさせてもらおうわ」

「何でも楽しめばいいんだ」

俺は能天気なままで述べた。

「何でもな」

この時が有頂天だった。けれど家が建った時。俺は地獄に落ちた気分になった。

「えっ!？」

俺は今の言葉が信じられなかった。何を言われたのかも。

「今何て」

「御免ね」

悲しい笑みで俺に伝えてきた。その笑みは今でも覚えている。

「私、一緒に行けないから」

「おい、何でだよ」

俺は慌てふためいた声で彼女に問うた。問わずにはいられなかった。

「何でだよ、別れるなんて」

「私、そんなの欲しくないから」

俯いてこう言ってきた。俺には信じられない言葉だった。

「一杯のお金も。立派なお家もいらないの」

「じゃあ何がいいんだよ」

呆然としながらも彼女に尋ねた。

「そんなこと言ったら。何がいいんだよ」

「歌だけでよかったのよ、本当は」

俯いて言ってきた。そんなことは思いもしなかった。

「だから。やつぱり」

「じゃあお別れってことか」

「あのアパートじゃ駄目よね」

「馬鹿言つなよ」

やつと建てた家だ。俺の夢だ。何でそれが諦められるんだ。俺は本当にそう叫びたかった。今までやってきたことが否定されたようにさえ思えた。

「そんなこと、絶対無理だよ」

「それは私もなの」

やはり俯いて言ってきた。伏せた目がやけに痛々しい。

「だから」

「来ないのかよ」

「ええ。私ね、お金は最低限でよかったの」

また俺に言ってきた。咎めはせずに自分の考えだけを。

「そんな立派な程は。お金お金って」

「それでも一緒にいてくれたんじゃないかなかったのかよ」

「そうね、今までは」

それは認めてきた。

「今まではね」

「これからは。無理だっというのかよ」

「ええ、やっぱり自分に嘘はつけないから」

また言う。もう言葉の一つ一つが俺に突き刺さるようだった。

「だから。一人で御願い」

「なあ」

俺はそれでも言った。ここまで来て諦められなかった。

「そのアパートも残すからさ。新しい家に」

「だから。それは無理なの」

やっぱりこう言う。首を縦に振ろうとはしない。

「もうこれ以上は。自分に嘘はつけないし合わないし」

「どうしてもか」

「貴方は貴方の夢を目指せばいいわ」

それは認めてくれた。けれど一緒には行けないと。それは変わらなかった。そのことがあまりにも残酷に俺の心に突き刺さって抜けなかった。

「けれど。そこには一緒に行けないから」

「そうか」

「ええ」

また頷いてきた。

「さようなら。だから」

「わかったよ」

俺もそれを認めるしかなくなっていた。遂に頷いた。

「それじゃあな。さようならだな」

「さようなら」

泣いていた。俺は泣いてはいなかったがどうしてもやりきれない気持ちだった。

「これで」

「あの橋あるよな」

俺は後ろを振り向いてそこにあるベイブリッジを指差した。この向こうに俺が建てた家がある。アメリカンドリームの俺なりの証が。「あの橋を渡りたかったんだ、ずっと」

「そうだったわね」

悲しい顔で頷いてきた。

「けれど。一人で」

「ああ。行つて来るな」

俺は悲しい微笑みで応えた。応えても何もならないのはわかってきた。もう終わったからだ。終わったがまだ残念な気持ちが残っていた。どうしようもないのがわかっていても。

「じゃあな」

「ええ」

橋を一人で渡るとそこには何もなかった。今の俺にはそう思えた。ついさつきまであんなに欲しかった、手に入れたかったものが今じゃ本当に何も無いように思えた。こんな、砂みたいに空虚なものを俺は欲しかったのかとかえって思えた位だ。

「幸せがこんな難しいものだったのかよ」

壁に俺のポスターがあつた。楽しそうに笑つていた。それを見ているだけで嫌になつた。無意識のうちに剥ぎ取つて粉雪で濡れる床の上に投げ捨ててブーツで破いてやつた。そうせずにはいられなかった。

俺の曲が響く。ロックンロールの新曲だ。ピアノの曲がやけに綺麗だ。けれどそれを聴いているとかえつていたたまれなくなつてしまふ。

「切ない音色だぜ、全くよ」

俺は一人そう呟いてその豪邸とやらに向かつて歩く。アメリカンドリームって奴がこんなに虚しいものだったのなら。欲しくはなかった。けれどそれを手放したくはなかった。あのレストアしたバイクも。全てあいつとの絆だったからだ。それでどうして手放せるの

か。俺とあいつの僅かに残った絆がその虚しい夢だった。それなら
ずっと握っていてやる、今決意した。その為に大切なものを失った
のなら。それとずっと付き合っ^てやるつもりだった。

OH！ポップスター

完

2007・4・14

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3684d/>

OH!ポップスター

2010年10月8日15時36分発行